

昭和バブルから
平成バブルへ。

モータージャーナリスト、レーシングドライバー、そしてチューナーと多方面で活躍する太田哲也が、世の中に自らのオビニオンを直球で発信し世相を斬る「オレの話を開け!」。

第28回は、GENROQの30周年にあわせ、自分自身の30周年を振り返ってみた。バブルに左右されたレーサー時代、事故を経て辿り着いた現在、そしてこれからの未来予測までを語る。

REPORT ● 太田哲也 (Tetsuya Ota)
PHOTO ● 市 健治 (Kenji Ichi)
ATO

オレの話を開け!

太田哲也の

30周年を迎えて

GENROQが30周年を迎えた。出版不況といわれる中、30年も続いてきたのはすごいことだ。そもそも自動車雑誌としては変わったネーミングの「GENROQ」は、江戸時代の元禄にあやかったらしい。元禄時代は、歌舞伎や能などの町民文化が花開いた。GENROQが扱うラグジュアリーカーやスポーツカーは歌舞伎や能と同様、生活の必需品ではない。クルマを移動の道具として捉えるなら本来なくてもよい、ある意味無駄なもの。だからこそクルマ文化が花開くのだ。

GENROQが産声をあげた1980年代半ばは、1991年のバブル経済絶頂期に向かって経済も人々の気分も上がり始めるバブル前後だった。土地の値段は上がる一方で、誰しもが未来は明るいと思っていたはずだ。そんな時期にGENROQがバブリーな存在であったスーパーカーを扱う雑誌として創刊されたの

はある意味必然だったろう。しかし、その後のバブル崩壊やリーマンショックを乗り越えて、継続発売されてきたことは本当にすごいと思う。継続できた理由は、スタートはバブリーな存在だったとしても、時代の変遷とともに文化としての面を打ち出すことに成功したからではないかと思う。

さて、オレにとつての80年代半ばからの人生はどうだったかというと、なんとも浮き沈みが激しかったな。

ところで近頃は日本株が高騰するなど、なんとなく社会の雰囲気はバブル前後と似てきた気がする。それで今回は80年代半ばからの自分を振り返りつつ、2015年以降の未来をオレがどう予想してどう生きようかと考えているかの自論を展開したい。

80年代にオレ自身も「創刊」

GENROQが創刊した80年代なかば、ある意味、オレ自身の「創刊」もこの頃だ。



大学を卒業しレースを始めて3年目、FJ1600という入門フォーミュラに出場していた。前年まで小さなスポンサーとアルバイトで貯めた資金でやっていた。愛車をレース資金捻出のために売ってしまっ、オートバイで筑波サーキットに通っていた。しかし85年から丸抱えで乗せてもらえるようになり、翌年はF3という若手が乗る中間フォーミュラ参戦の話が来た。この頃から職業ドライバーになる夢が本当に遠うかもしれないという手ごたえを感じ始めた。F3に出場したシーズン末、当時トップカテゴリだったグラチ

ヤン、そして翌年からF3000に乗せてもらえるようになった。この頃になると乗車手当てやサラリーももらえるようになった。そして88年、待望だった自動車メーカーからワークスドライバー契約の話が来た。

当時GCやF3000のファイトマネーや契約金も数千円単位で高額だったが基本的に1〜2年契約。ところがマツダとは本社契約で、毎年自動更新、オレを推薦してくれた先輩ドライバーから「太田もこれでレーサーとして一生安泰だな」と言われた。そもそもが職業としてドライバーを目指していたので、永久就

職的なワークスドライバーは最も望むカタチだった。ついにここまで来た!と思った。それが勘違いだったのだけだ。

毎年毎年生活は豊かになる。バブルに浮いているという感覚はなく、銀行にすずめられてゴルフ会員権やマンション。レースから帰ると高級レストラン。若造は数年後にはじけることも知らずにまさに若気の至り



バブルの残滓を巡ってみる

GENROQが創刊した80年代半ばより始まったバブル経済。その痕跡を東京都内で探すと意外に見当たらない。1991年に竣工し奇抜なデザインが話題をさらった世田谷区のマツダM2ビル(写真①)は残っているものの経営母体は変遷している。一世を風靡したディスコは悪く閉鎖されてジュリアナも今は駐車場だった(写真②)。多額の税金を注ぎ込み「バブルの魂」と脚燈されながら1990年に完成した東京都庁舎は、2020年開演予定である東京オリンピックの広告塔になっていた。絶大な経済効果が見込まれ「平成のバブルを呼ぶかも」と期待される次期東京オリンピックを、バブルの象徴のひとつに数えられる東京都庁舎が宣伝しているのには不思議な巡り合わせを感じた。



太田哲也の30年前

30年前の1984年、太田氏はFJ1600でチャンピオン獲得(写真上)。レース界ではルーキーも同然で、クルマを売って資金を出しサーキットに通っていたというほど。ちょうどその頃からバブルの影響がレース界にも浸透し始め、F3→F300と順調にステップアップ。80年には6シーズンめのシートを獲得していた。(写真下)。まさしくバブル絶頂期のこの頃、太田氏にとっても最も多忙だったという。結婚もして順風満帆だったバブル当時は投資の誘いも数多くあり、あの「ゴルフ会員権」も購入したという。太田氏の自宅のどこかには、一度も行ったことがないゴルフ場のプラチナメンバーが今も眠っている……。



スに転進する人はいたが、オレのようにレース専業からモータージャーナリストになる例はかなり稀だろう。それまで文章など書いたことがない。そんなオレに「Tippo」という雑誌が手を差し伸べてくれた。日当で計算するとギャラは賞金を含めたレジャー時代の20分の1くらいだったけど、仕事があるのはうれしかった。レースに関しては、その後、ル・マンで走るフェラーリのプライベートチームに誘われたのがきっかけで、翌年からフェラーリの準ワークスチームにも参加させてもらい、その繋がりからフェラーリクラブやコンスからも支援を頂き、

97年には自らのチームを立ちあげてフェラーリでGT選手権に出場することになった。序盤は苦戦したが最終戦で優勝し意気揚々としていた。レーサーとして完全復活!と思った。それが勘違いだった。

チャンピオン宣言をした98年シーズンの5月3日、富士で事故に遭い、3年間の療養生活、身体障害も負った。でも終わりが来るから始まりがある。家で書き下ろしのドキュメント本「クラッシュ」を書き、これがベストセラーとなり、印税が入ってきた。その後、2作目「リバーズ」の内容をベースにした映画化の話が来て、それなりの契約金が頂けた。そうやって何とか3年間をしのぐことができた。

終わりがあるから始まりがある

でバブリーな生活を送っていた。バブル崩壊は突然にやってきた。きつと生意気だったんだらう。マツダはル・マン24時間で総合優勝したのに、まさかのレース活動完全撤退宣言。それ以外に所属していたF3000もグループAもすべてのチームが解散。レースを始めてから、初めて年が明けて乗るマシンがない状態となった。

もうレーサーという職業は難しいのではない。そう思っ、30歳を超えて初めて物書きに転身することを決めた。

モータージャーナリストからレー

21世紀のバブルを期待

バブル崩壊を経験すると、好調な時期には必ず終わりが来ると思うようになる。前述したようにバブルの頃はバブルだと思っていなくて永遠



2010年からスタートした出張授業は今はライフワークのひとつになっている。振り返ればバブル以降、約5年おきに人生のターニングポイントがあった。今年もその節目だが何が起ころやら。さらに5年後の東京オリンピックではバブル再来を期待したいものだ。

に続くと思っていた。しかし今は「永遠は絶対ない。現状維持もない。上がるか下がるかだ」と思うようになった。だから2008年のリーマンショックの時も、モータージャーナリストも職業としては難しいだろうと思いい、チューニングブランドを設立し、50歳を前にして新たに経営者としてスタートすることにした。それがTEZZO BASEだ。モータージャーナリストとしてはいくつもの雑誌は廃刊になったが、GENROQをはじめいくつもの雑誌で今でも連載を持たせていただいている。

スタッフもだいぶ増えた。最近、昔と似た浮揚感を感じている。また「人生の好景気」がやってきたのかな、と。ただあの時と明らかに違うのは、この状態が「永遠」ではないと知っていることだ。この先必ずターニングポイントがあって急落するタイミングがある。オレとしては2020年東京オリンピックではないかと考えているのだが……。

オレも、GENROQから仕事を頂いている以上、もう少しGENROQ的な浮ついた(?)クルマ選びをすべきなのかな。どんなクルマかな。理想的なのはロールズのレイストとかベントレーとかなのかな。それをチューニング&モデファイして乗りたいたいなあ。それにはお金があと何倍も必要だな。本格的にバブルが来ないかな。

Tetsuya OTA ENJOY&SAFETY DRIVING LESSON with Volkswagen 6/6(土)袖ヶ浦フォレストレースウェイで開催決定



「正しい運転を楽しく学ぶ」をテーマとしたドライビングレッスンを、太田哲也氏を校長に迎えて開催。今回は教官として、フォルクスワーゲン・グループ・ジャパンの協力によってゴルフGTI、ゴルフR、ポロGTIなどのフォルクスワーゲンブランドのスポーツモデルが一挙に揃う予定。レッスンメニューはベーシック、アドバンスクラスの他、袖ヶ浦を1周ひとりで走ることができるスパタイGPも併催する。当日は、山路権一選手の1周忌となる「山路ラン」も道中コーナーとして行う予定だ。詳細はウェブにて、<http://www.sportsdriving.jp>